

昭和36年梅雨前線豪雨

昭和36年梅雨前線豪雨、通称「三六災害」（さぶろくさいがい）は、昭和36年（1961年）6月24日から7月10日にかけての大雨による災害です。6月9日に梅雨入りしたものの同年は好天が続き空梅雨が心配される状況でした。23日頃から熱帯低気圧の北上に伴い梅雨前線が北上・活発化、24日には本州南岸に停滞し東北から九州までの広い範囲に雨が降り始めました。熱帯低気圧は、26日夜台風6号となりましたが、比較的弱いもので27日夜室戸岬付近で消滅しました。しかし、台風の東側を北上した南方の暖湿空気の影響が加わったため、26日から28日にかけて前線の活動が特に激しくなりました。

当初は恵みの雨とも見なされましたが、25日頃より四国、近畿、東海、甲信、北陸、関東各地の44都府県に大雨をもたらしました。25～26日には、強雨域は紀伊半島の南東部と大阪を中心とする地域に分かれ、阪神地方では26日早朝に特に雨が強くなりました。7月5日頃まで、局地的に連日100mm以上の雨量を記録し、44都府県にまたがって洪水、山崩れ等の災害をひきおこしました。約300名もの貴い人命を失い、家屋の全壊および浸水等による罹災者は366,914名をかぞえました。

被害 死者 - 302名 行方不明者 - 55名 負傷者 - 1,320名
 家屋全壊 1,758戸 半壊 1,908戸 床上浸水 73,126戸
 床下浸水 341,236戸 (消防白書より)

こと兵庫県では、41名の死者がでました。これは、神戸市で住宅造成地の斜面などが崩壊したことによるもので、同年に宅地造成等規制法が成立する要因ともなりました。

神戸市内および阪神間の各河川では水路が短く、且つ急流であるため、一齣に増水し低地の道路および宅地に流れ込みました。上坂部地区でも写真のように昆陽川が氾濫し、学校が休校になりました。

昆陽川の排水能力の脆弱さは前々から指摘され、強化対策として、昭和30年に久々知運河を開削しました。それでも万全とは言えず、36年豪雨など様々な水難を経て川の改修がさらに進み、コンクリートで固められた今の水路のようになったのです。



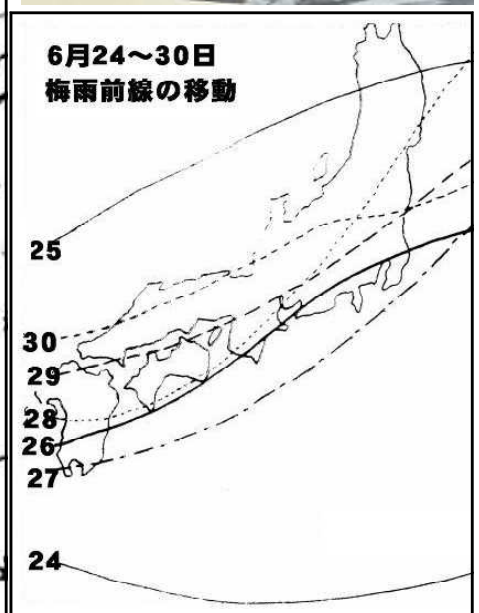
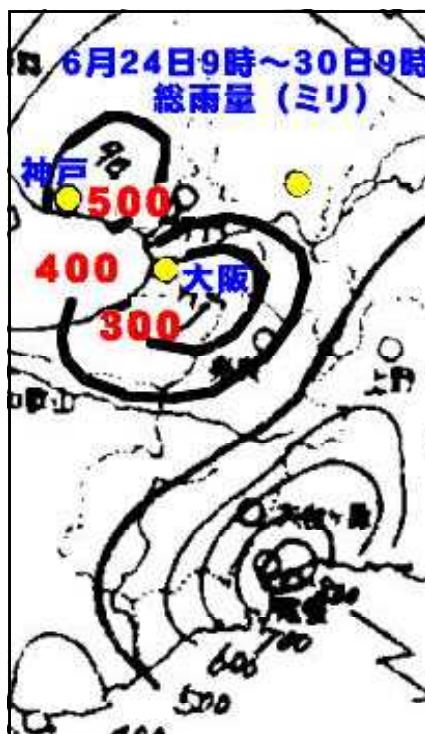
不安そうに窓から外を見る



学校付近 昆陽川が氾濫

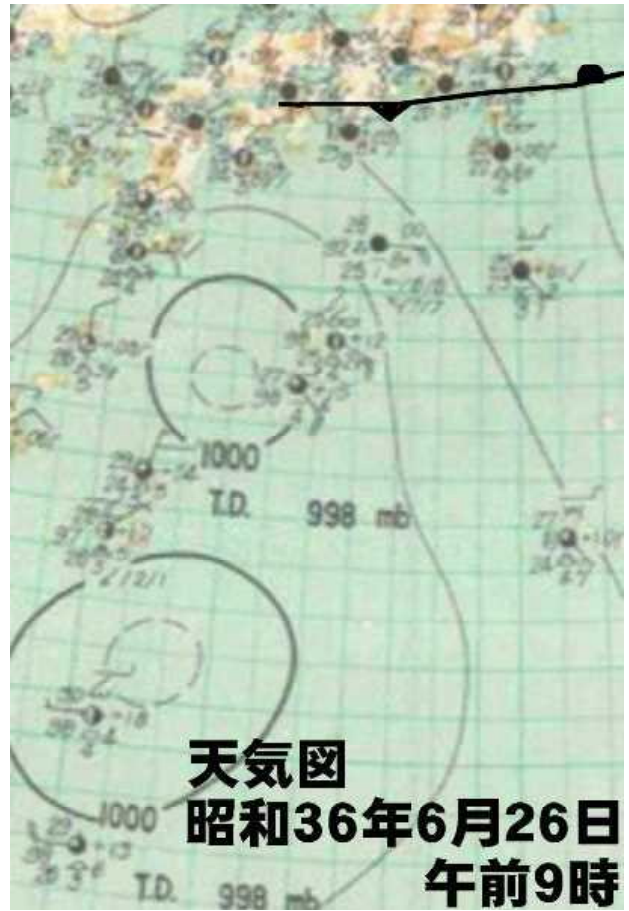


学校北門前





学校東端 昆陽川改修に伴い便所を取り壊す



天気図
昭和36年6月26日
午前9時



改修の終わった右岸(左手川岸) 学校南門前の道路に架かる橋



改修前の昆陽川

参考文献 昭和36年梅雨前線豪雨 (Wikipedia)

参考文献および雨量図 前線移動図「災害をもたらした気象事例 昭和36年梅雨前線豪雨」 (気象庁)

天気図 原典：気象庁「天気図」、加工：国立情報学研究所「デジタル台風」